
百合とライオン

矢藤勝海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百合とライオン

【Nコード】

N8935F

【作者名】

矢藤勝海

【あらすじ】

友情甘味付加な女子高校生ふたりの話。若干へたれの主人公とツンツンの親友の放課後。ほのぼのというより、ばっさりあっさり、でもベタ。甘めの友達話が読みたい人向け。

自分の名前とともに16年過ごした。

日本人の平均寿命を鑑みるに人生の序盤をやつとクリアしたあたりだが、そろそろ自分の名前に異議を唱えてもいいはずだと思う。

要するに、「百合」という名前があまり好きではない。日本人の好む曖昧な表現方法を取りやめるなら、嫌いだ。

理由は、標準的環境で成長した日本人に推察できる範疇。日本で花の名前を付けられた少女は、「名前と実像」と題されてしかるべき逃れられない宿命を負う。

ユリ。漂う香りは清冽、純白の花は清楚、にもかかわらず、すらりとした姿勢を活かしてたてれば部屋の雰囲気ぐつと変わる強い存在感……嫌いではない、むしろ好きな方だ。ただ、日本人はあの花を高嶺に置きすぎている。

よって。

親戚が集まった席で微妙な視線を送られてしまったりもするだろう。届けてもらった生徒手帳が、迷わず隣の友人に渡されたりもするだろう。委員会で初顔の後輩に、顔を見た後、三秒の間を空けてから挨拶されるという不可思議な現象に遭遇したりも……。

「しないよね、普通」

「いくらなんでもないでしょうね、普通」

机に突っ伏した頭を横向きにする。

「初対面の人のツラ見て“え”って顔するのは極刑に値すると思わない、トーコさん……」

呪詛に満ちた声を吐くと、百合はあんだといいたくなる美人さん（私の生徒手帳を渡されたのはこいつだ）は桃色の爪に息を吹きかけた。

「価値のない思考を人に押しつける前に、名は体を表すという言葉が存在する国に生まれた自分を呪いなさい、ゆ・り・ちゃ・ん」

「ゆりちゃんゆーな冷東子」

途端、頬にひやりとした指先が這い、鋭利な桃色の凶器が軟らかな肉を圧迫する。

「百合？」

甘ったるいお花畑が永久凍土へ変化した。このままでは地球滅亡も近い。

「ご、ゴメンね、東子ちゃん。エヘ！」

一般的使用者が見あたらないことで有名な捨て身の愛嬌語とともに保身に走った。走ったが、何故だろう。爪の形が先よりはつきりくつきり切迫した気がしてならない。

「違うでしょう、『申し訳ございませんでした、東子様』。はい、どうぞ？」

明らかに同級生とかクラスメートとか小学校からの親友もどきとか誕生日の都合上いつこ下の女に使うことばではないですよね、ソレ。

心の中では人権が生存していたものの、明らかな命令形の視線を前に屈服した。

リピートアフターミー。東子風に訳すと、繰り返せ、下郎。（ヤツは時代劇のファンだ。）

「モウシワケゴザイマセンデシタウコサマ」

「そうそう、世の中弱肉強食なんだから言葉には気をつけないとダメよ？」

サバンナから日本の高校一教室までやってきたライオンは、そういつてにつこり笑う。鬣も牙もないのに美しく獰猛だ。恐しい。

ライオンの名は、功刀東子と書いて、「くぬぎとうこ」と仮名をうつ。

刀と東が字面を引き締めるのか、格好いい名前だと思う。何より、珍しい名字だ。彼女のご家族以外で耳にしたことはない。

出会いは小学四年生。進級直後の教室で、担任は、私の名前を「ここのえゆり」と読んだ。気持ちわかる。九重と書いて「くのう」

と仮名うつ人は少ない。私と東子は先生に名前を読んでもらえなかった繋がりだったのである。

当時の東子は、私ともども幼さに裏打ちされた可愛さこそあれ、間違っても美少女ではなかった。現在進行形で美がつかない私が保証する。

なのに、いつの間にやらぐつと追い抜かれた。ついでに、性格と凶暴性もぐつと……やめた。とりあえず、ヤツは合気道4段だとだけいっておく。

東子は天然で色素が薄い。髪は地毛では珍しい赤茶色。細くて柔らかい。面倒を見るのが一苦労タイプの髪質ではあるが、ケアが完璧なのでそりやもう美しいの一言である。輪郭にゆがみがなく、鼻の配置がいい、唇の色も形も絶妙。健康的な白さを保つ肌。スポーツで適度に鍛えられた手足はすんなりと長い。だが、友人としてモデルの道だけは薦めないでおこう。東子の暴力癖がなくなるとは思えない、関係者が気の毒すぎる。私でさえこの暴力美人と話すたび、人間の評価は外見で決めてはいけなさと認識を改める有様だ。なのだが。

同時に、やっぱり美人はイイ…と思わずにはいられないのも事実だ。

熱心にネイルアートに励む東子を見るのは楽しい。正直、彼女の友人を全うできる理由の50パーセントは彼女の鑑賞的価値高さ外見にあるような気さえする。

……しかし、言い換えれば、ライオンの凶暴性その他諸々に目をつむってしまう面食いということに。

ショックだ。危機感知能力の欠陥じゃないのか、まずくないか、自分。

発覚した事態にワナワナふるえている私を放置して、1Cのライオンは颯爽と立ち上がった。ようやく爪のお手入れに満足したらしい。目立った汚れのない学生靴を片手に、満足そうに微笑んでいる。このライオンは己の美貌を磨くことに関して手は抜かないので、

草食動物たちより遙かに丁寧な仕事をする。でも、そんな様子を他人には決して窺わせない。（私がいても気にしないのは友情であって、草食動物に食われる草以下認識のせいではないと信じている。疑ったら負けだ。）

プライドの高い百獣の王。九十九頭を高めから見下ろす雄姿に反して、影でせつせと努力する姿はいじらしく、ちょっと可愛い。

さて、いじましいシーンを終了したライオンだが、コートを着るなり一言。

「百合。貧乏揺すりはやめなさい、これ以上株価が下がったらどう責任をとってくれるの？」

「……………」

貧乏揺すりじゃなくて我が身の欠陥に怖れを抱いていたんですよトーコさん。あと、私が何もしなくても上がった株価は下がる運命なんですよトーコさん…つか株にまで手エ出してたのか、あんた…。

具体的に責任とらされる恐れが出てくるので反論はせず、黙々、鞆に何かをつっこみ素早く帰り支度を整える。対東子仕様の私はチキンド。しかし、下手に反論するより平和と安全が約束されている。ほんとに世知辛い友人関係である。

帰り道の東子は機嫌がよかったので、比較的安全と判断して再び愚痴を開始する。

「おかしいじゃん。芳香剤としてばらまかれている現実に気づこうよ、うちのユリなんて勝手にうちの庭に現れて勝手に増殖していったんだよ根性たくましい植物だよあれ」

もともとそのスペースにいたタンポポたちはいつの間にか姿を消した。

生存競争に敗れたのだと思うと、たくましいを通り越して生々し

い。

「見た目だけは文句なしに美しい花の代表でしょう。まあ、私のいところは嫌っていただけだ」

「どうして？花粉症？」

「ユリの花が萎れると、白い首が折れるようで気味が悪い、ですつて。大したロマンチストだわ」

東子の声は、はつきり皮肉だった。

気の毒に。

百合が嫌いなところも九十九頭の例に漏れず、一方的に睥睨され心理的に服従させられる関係なのだろう。うつかりもらした軽口が東子の地獄耳に回収されていびられているのかもしれない。目に浮かびそうなりアルさが恐ろしいを通り越して、東子らしい。式にすると「恐ろしく東子らしい」と表記される。

しかし、いとこ殿の解説に思わずひらめくものがあつた私は、迂闊にも口を滑らした。

「そっか、東子を花にするとユリなんだ」

「ふふ。百合、何が言いたいのかしら？」

「……」

あつれー。東子さんが今までになく可憐に笑ってますヨー？

唐突にやってきた自分滅亡の危機に遠い目をしながら、脳内だけフル稼働できる人間とは、実に器用な生き物だ。現実逃避ともいう「いや、ほら、私の名前は好きじゃあないけど、東子に似ている花を嫌いにはなれないな、とね？」

そういうことにしておこう。

「……………」

東子は、美しい柳眉の間隙にしわを刻んだものの、黙って革靴を進めた。若干速度が速い。

「どしたの、トーコさん？」

1 東子は怒っている。

2 東子は呆れている。

3、東子は私の殺害計画を練り始めたところだ。……これではありませんように。

焦り始めた私の脳へ、冷たいソプラノが突き刺さる。

「百合のそういうところ、限りなく腹が立つ」

やばい、限りなく1だ。

「とー…」

慌てて追いかけようとして、やわらかな赤茶色の髪からとびだした桜色の耳が、もっと色鮮やかになっていることに気づいた。

おやおやおや。

東子の速度に調整しながら、ニヤニヤしてやる。

「トーコさん、耳が赤い」

「頸骨へし折られなくなったら黙りなさい」

赤い耳のライオンは珍しく可愛いのであった。(凶暴なままだが。

)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8935f/>

百合とライオン

2010年10月8日14時48分発行